



牛瀧 文宏著

快感! 算数力ハイパー

講談社 2005



毎日生きていると、いろんな場面で数やら形やら理屈が絡んでくる。そしてこういったものごとの裏には、必ずといっていいほど算数や数学が関わっている。だから、算数・数学のちょっとしたコツを心得ていると、スキッと解決することも多い。それはまさに快感だ。そんなことを知って使っていただきたいという思いで「快感! 算数力」を出版したのが一昨年のこと。もともとは、大学の「数学科教育法」での内容をベースにした部分もあるものの、数式を一切出さずに、算数や数学がこんなに使えるんだと言うことを説明しきったのが功を奏して、多くの反響を頂いた。この「快感! 算数力 ハイパー」は出版社からの要請に応じて「快感! 算数力」の続編として執筆したものだ。ただ、ちょっと幅を広げて、楽しい算数・数学の話題もいろいろ書いた。ちょっと意外ではっとするような算数・数学ネタもいろいろと取り混ぜた。だから、この本では「使える」意外にも「意外さ、おもしろさ、はっとする」なども全体を通してのキーになっている。しかしそれは、みんなのための算数・数学であって、マニアや受験のためのものとは異なる視点を基本とした。読んで下さった方々に、算数や数学のよさや考え方をわかっていただき、算数・数学はこんなにも近くにいるんだということをなんとか伝えたいという気持ちで書いた。

前作の「快感! 算数力」を出版して、私の行動範囲も随分と広がった。前書のテーマであった「生活の中で使える算数・数学」ということがきっかけになって、請われて大阪府下の小学校や中学校に足を運び研究授業などに参加している。そこで、分不相応にも先生方に助言をしたり、算数や数学に関するお話をさせて頂いたり、これまでとは違った活動も開始した。基本的に数学が好きで面白くてこの道に入った者にとって、こういう実践が出来るだろうかと当初とまどった。しかしそれは、最低限求められる算数の力や、万人がわかる数学のよさなどを以前にも増して考えるいいきっかけとなった。

雑誌の取材などを通して「算数や数学の力がつくかどうかですか?」といったことを尋ねられた。取材に来るライターから尋ねられるのなら一般読者も知りたいところであろうと思い、本書で私見を披露させて頂いた。その中には私自身が講演や取材を通して語ったことが含まれている。加えて、前作への読者からの声を通して、多くのことを学んだ。自分としては非常に易しく書いたつもりであったが、「面白かったけど、難しい」という声の多さに直面し、算数や数学を伝えることの難しさを思い知った。本書ではこの点をどう乗り越えさせるかも課題とした。

嬉しいことに、両方をお読み頂いて批評を下さる学生さんもいる。これは励みになる。また一般の読者からの反応も様々だ。面白いと感じて下さる箇所が多用に驚くと同時に、だからこそ色々な角度から算数・数学を語る必要性を実感した。

本書の発売後、別の出版社の編集者と話をする機会があった。その方によると英語と数学は勉強における2大コンプレックスだそうだ。大人になっても勉強を続けて、身につけたいと思われる人も多らしい。私の書いているものは小さなものだが、結果的にそういう人の助けになればいいとも思っている。

(うしたき ふみひろ 理学部教員)



カット

山岡 景一郎 (経済学部3年次生)

岩本 誠吾共著

現代安全保障用語事典

信山社出版 2004



2002年2月頃だったか、市ヶ谷の喫茶店で専修大学の佐島直子助教(国際政治)が「今度、安全保障の辞典でなく事典を作りたいんだけど、どう思う?」と私(国際法)に相談してきた。「面白そうだから、やろう。こんなもん勢いでやらんとできんから、一気にやろう」と即答した。しかし、それが後で大変な仕事を背負い込むとはまったく考えもしなかった。

佐島さんが編集代表になり、丸茂雄一氏(防衛庁キャリア組)、関井裕二氏(金融アナリスト)、田岡俊次氏(元朝日新聞編集員)、今泉武久氏(元防衛庁国際室長)、村岡侖衛氏(信山社)と私を集めて、いざ打ち合わせ。事典の方針、目次、用語の選定、資料及び索引のあり方など。私以外みんな東京在住で、何度となく上京し、また千葉の勝浦で合宿もした。2年余りで本書を完成させたことは、執筆者全員及び出版社の驚きであった。

本書の内容は次の通りである。第一章「安全保障情勢を読む」佐島担当、190項目。第二章「安全保障と国際法」岩本担当、110項目。第三章「防衛政策・防衛行政」丸茂担当、150項目。第四章「安全保障と経済・金融」関井担当、60項目。第五章「現代の戦争・紛争」田岡担当、64項目。「資料及び索引」として、主要兵器やイラク関連資料とともに、英語関連の階級表、組織用語及び英略語表(今泉担当)全680頁あまり。

本書は、国内政治・国際政治・国際法から経済・歴史まで安全保障に関連する事項を網羅的に取り上げ、コラムも付けた。それも、2004年1月時点の内容として、最新情報の提供を図った。最も重要な編集方針は、右寄りとか左寄りといった思想的・政治的な偏向なく、本書が読者にとって安全保障問題を「素直に」見つめ直す出発点となるように配慮する、ということであった。

そもそも第2次世界大戦以降つい最近まで、日本における安全保障の議論は、日本国憲法や冷戦構造の制約から、左右双方から議論の余地を与えない一

方的で、硬直化した、空疎な神学論争的なものばかりであった。例えば、日本の学会では、同じ研究対象なのに、平和研究は存在しても、戦争研究や軍事研究はタブー視された。冷戦が終結し、戦後が遠くなり、漸く冷静且つ生産的な安保論議ができるようになった現代において、安全保障を「しなやかに」考えるために、本書の出版意義があると確信している。ちなみに、佐島さんは、類書のない本事典の編集が高く評価されて、上智大学出身マスコミ関係者の「マスコミ・ソフィア会」の本年度「コム・ソフィア賞」を受賞した。

事はこれで終わらない。出版してホッとしたのも束の間、佐島・丸茂・岩本を編集委員として、本事典をベースに発展させた叢書『現代の安全保障』全10巻を作ろうという壮大な話がにわかに浮上して来た。あの時にコーヒーを飲みながら軽い気持ちで「やろうぜ」と返事したことが、ここまで繋がることは夢にも思わなかった。これでまた、宿題に追いかけられる夢に悩まされる日々が続くのであろう。内心不安だが、請うご期待。

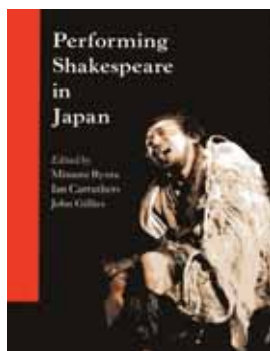
学生諸君、先ずは、本事典を手にとり、拾い読みでもいいから、パラパラめくってほしい。そこから、安全保障の議論の扉が開かれる。

(いわもと せいご 法学部教員)



カット

山岡 景二郎(経済学部3年次生)



鈴木 雅恵共著
Performing Shakespeare in Japan

Cambridge University Press 2001

他3冊



アジアのシェイクスピア劇の受容の歴史は、その地域の西欧化/近代化の歴史と深い関わりがある。インドなどのように、英国植民地としての長い歴史を持ち、支配者の言語である英語教育の最高峰としてシェイクスピア劇を受容してきた国と、日本のように西欧諸国と対等であることを誇示するために自らシェイクスピアを移入・加工してきた国とでは、受容の経緯の差はあるものの、テキスト研究や、西洋の演劇形態を手本とした上演が「英文学・英語学」研究の対象とされてきた一方、地域演劇や翻案上演、大衆文化の中に取り込まれたシェイクスピアの存在は長く黙殺されてきたと言ってよいだろう。

しかし、二十世紀末になると、アジア、それも特に日本のシェイクスピア上演の多様性が、西欧の演出家や研究者に好意的に受け取られ、国際学会でも真剣にとりあげられるようになってきた。こうした風潮を安直なオリエンタリズム志向、または、欧米による（あるいは、欧米化された日本人による）新たな「文化搾取」ではないかと疑う向きもある。だが、そのような結論を出す前に、日本人自身が、自分の国も含めたアジア各国のシェイクスピア受容の歴史や、地方の伝統演劇の形態をどれだけ把握しているのか再検討し、西欧及び他のアジア圏の研究者・実演家との議論を積極的かつ継続的におこなうことが必要である。

Performing Shakespeare in Japan は、そうした試みの一つとして、故高橋康成氏の司会のもとおこなわれた、英米豪日の研究者による国際セミナー、“Japanese Performances, Adaptations, Translations and Co-productions of Shakespeare”の成果として生まれた。1996年4月にロス・アンジェルスでおこなわれた第6回国際シェイクスピア学会大会のプログラムの一つとして企画されたこのセミナーは、能、狂言、歌舞伎、黒沢映画などで扱われた、おなじみの「日本の」シェイクスピアだけではなく、鈴木忠志、蜷川幸雄、野田秀樹、堤春恵らによる、ラディカルとも言える演出舞台や翻案作品が、等しく「シェイクスピア上演」として論じられた、という点で画期的なものであった。

筆者はこの本の中で、夢の遊眠社時代の野田秀樹の論考“*The Rose and the Bamboo: Noda Hideki's Sandaime Richâdo*”及び、彼へのインタビューのまとめとその英訳を担当した。その他、本著には、サブ・カルチャーとしてのシェイクスピアに関する論考や、伝統演劇とシェイクスピアに関する寄稿文も含まれ、明治期から20世紀末にかけての、広義の意味での日本のシェイクスピア上演の全体像が浮かび上がる構成になっている。

この本の出版を待つ間にも、アジア圏においてシェイクスピア上演が論じられる機会が増えていった。*Shakespeare Global/Local* (Peter Lang, 2002) は、1997年に香港で開かれた国際シェイクスピア学会の成果である。筆者自身は、明治期の川上音二郎一座と、坪内逍遙をモデルにした堤春恵氏の戯曲『正劇室鷲郎』(1995)、台湾総督室鷲郎(オセロ)を琉球出身者と想定した、石澤秀二脚色・演出による青年座公演(1990)、『オセロ』をヒントに生まれた、真喜志康忠氏作の沖縄芝居『按司と美女』の三本の舞台を比較対照した論考を書いた。この本に納められている他の論考もまた、シェイクスピアを媒体とした東アジア圏の文化の変遷を真摯に論じたものである。

2001年には、ケンブリッジ大学で開かれた国際学会 SCAEVA でも、アジア発のシェイクスピア上演について討議された。『英国演劇論叢』(京大出版センター, 2003)に収められた拙論“*A Midsummer Night's Dream in Okinawa*”はその時の成果である。

『複数の沖縄:ディアスポラから希望へ』(人文書院, 2003)は京都発の沖縄本であるが、この中で筆者は「近代沖縄とシェイクスピア受容」という日本語コラムを書いている。

日本におけるシェイクスピア上演研究の歴史はまだ浅く、個人として世界に発信し、正統な評価を受けるにはまだ困難が伴う。ここに紹介したのは、まだ発展途上にある(と信じている)筆者の今の状況報告である、と解釈していただきたい。

(すずき まさえ 外国語学部教員)



川北 稔著

アメリカは誰のものか

：ウェールズ王子マドックの神話

NTT出版 2001



この本は、16世紀のイギリスででっち上げられた神話が、のちに多くの国の、多くの人々を動かし、行動に駆り立てた様子を描いています。もともとは「神話の効用」という副題をつけたいと思っていたものです。

「ウェールズの王子マドック」という架空の人物の物語がたどった運命をつうじて、アメリカの領有権をめぐる近世のヨーロッパ諸国の抗争や、イングランドがウェールズやスコットランドというケルト人の住む地域を取り込んで、イギリス(ブリテン)という近代国家をつくり上げていく様子を描くことが、この本での私の目的でした。

「1492年にコロンブスがアメリカを発見した」といいます。本当でしょうか。むしろ、コロンブスよりはるか以前から、アメリカには、イギリス人が「インディアン」とよび、スペイン人が「インディオ」と呼んだ先住民たちがいました。彼らからすれば、「発見」などということは意味のないことでした。しかし、ヨーロッパ人にとっては、その後数世紀にわたって、移住し、経済活動をし、新しい社会をつくることのできる広大な土地を得たことになるわけで、このできごとは、とてつもなく大きな歴史的な事件でした。しかも、コロンブスがスペインの支援を受けていたことから、南北アメリカは基本的にスペインのものだとされました。それに、スペインとポルトガルとは、1493年、ローマ教皇を仲介者として地球全体を仲良く二分する話をつけてしまいました。

むしろ、このような決定には、現地の先住民はかわっていませんでしたし、ヨーロッパでも、ローマ教皇の権威を認めないオランダやイギリス、フランスなど、主にプロテスタントの立場から、はげしい反発が起こりました。抗争は、アメリカからスペインに戻る銀船隊を、公認の海賊である私拿捕船に襲わせるような実力行使から、相手国がアメリカでいかに残虐行為をしているかという宣伝合戦(「黒い伝説」)などに発展しました。

こうした情勢のなかで、イギリスのエリザベス女王の宮廷がでっち上げたのが、「マドック神話」でした。何百年もまえの王子マドックが、コロンブスよりはるか以前に一族をつれてアメリカに渡った、というのです。当時、ウェールズは、イギリスに統合されたばかりでしたが、それでも、これが事実なら、アメリカはイギリス領となるはずだったわけです。

もっとも、当時は、この話がでっち上げであることはひろく知られていたと思われませんが、200年後の18世紀、イギリスがしきりにスペインと戦争をするようになり、この神話が復活させられたとき、イングランド人はもとより、当のウェールズ人やスペイン人でさえ、これを信じてしまうのです。マドックの子孫はいまだ、アメリカ・インディアンの中で、キリスト教やケルト語など、ウェールズ人としてのアイデンティティを保ちつつ暮らしているとされ、彼らに遭遇したとする話が、つぎつぎと出現しました。

ついには、「ウェールズ人のインディアン」つまり「マドックの子孫」探索の旅に駆り立てられる者も出現し、18世紀末のアメリカをめぐる国際関係をいっそう複雑にしていくのです。

(かわきた みのる 文化学部教員)



カット

山岡 景二郎(経済学部3年次生)